

人を、想う力。街を、想う力。



公益財団法人
彫刻の森芸術文化財団
CHOKOKU-NO-MORI ART FOUNDATION

2025年7月8日

報道関係各位

三菱地所株式会社
公益財団法人彫刻の森芸術文化財団

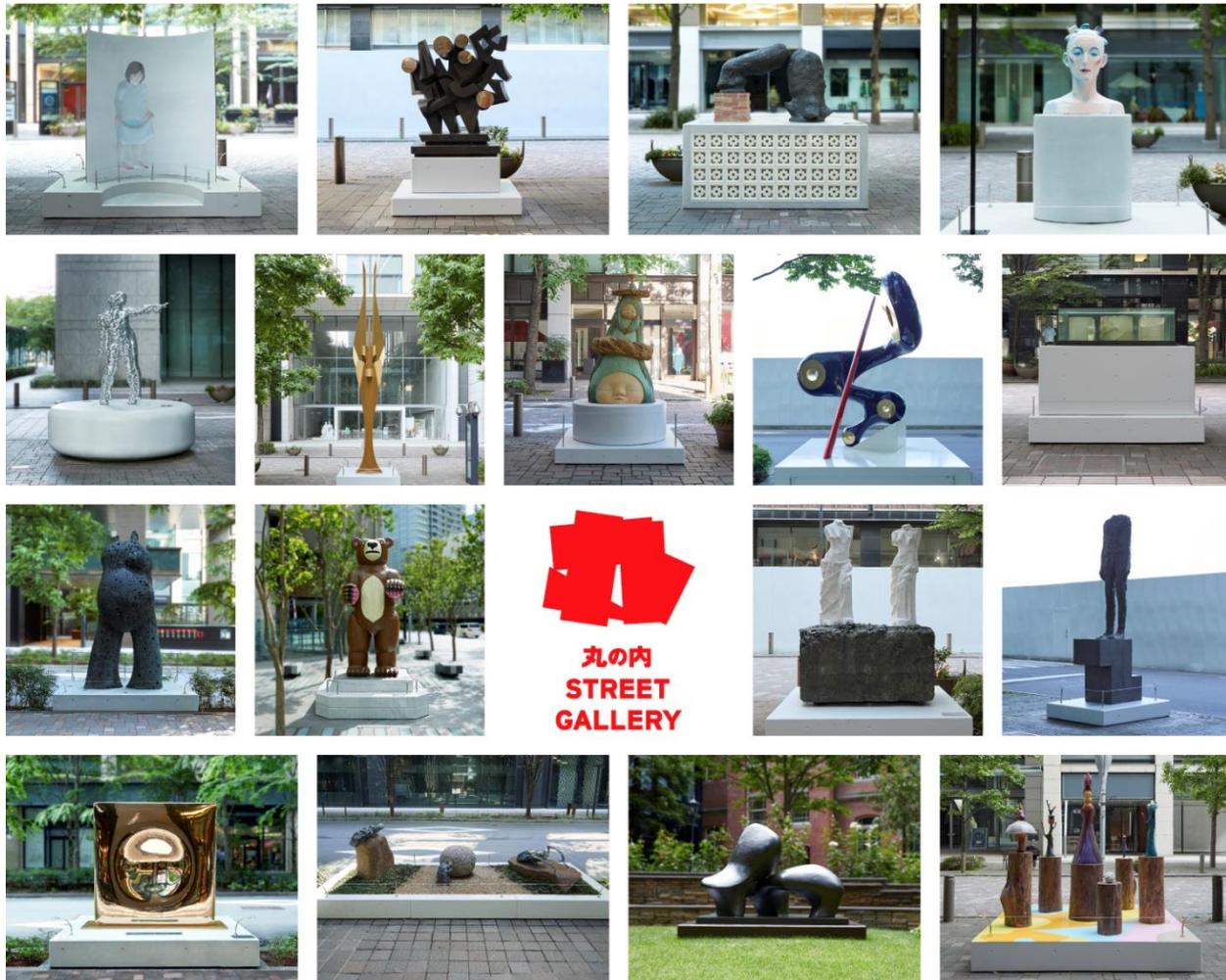
丸の内仲通りで国内外の近現代アートに出会う、触れる 「第44回 丸の内ストリートギャラリー」を開催

中村萌、山本桂輔、佐藤正和重孝、イワタルリの新作を設置

三菱地所株式会社と公益財団法人彫刻の森芸術文化財団は、芸術性豊かなまちづくりを目指して、1972年より丸の内仲通りを中心に、近代彫刻や世界で活躍する現代アーティストの作品を展示するプロジェクト「丸の内ストリートギャラリー」を展開しています。このほど3年ぶりとなる新作の設置や、一部作品の入れ替えを行いました。公式サイトでは、今回新作を展示したアーティスト4名の作品公開を本日7月8日より開始いたします。

*公式サイト：https://www.marunouchi.com/lp/street_gallery/

今回の「丸の内ストリートギャラリー」では、丸の内エリア（大手町・丸の内・有楽町）内に計17の作品（現代作家による新作4点、入れ替え作品3点、継続作品10点）を展示しており、丸の内を散策しながらアート鑑賞を身近に体感していただけます。



▲「第44回 丸の内ストリートギャラリー」ロゴと作品ラインナップ

■「第44回 丸の内ストリートギャラリー」実施概要

展示期間：2025年7月～

展示場所：丸の内仲通り、丸の内オアゾ前、一号館広場（三菱一号館美術館）

主催：三菱地所株式会社

監修：公益財団法人彫刻の森芸術文化財団

展示アーティスト：H&P.シャギヤーン／イワタルリ／ウンベルト・マストロヤンニ／佐藤正和重孝／ジム・
 ダイン／中谷ミチコ／中村萌／名和晃平／パヴェル・クルバレク／舟越桂／ヘンリー・
 ムーア／マグダレーナ・アバカノヴィッチ／三沢厚彦／ハツ木のぶ／山本桂輔／ルイジ・
 マイノルフィ／レナーテ・ホフライト *五十音順

公式サイト：https://www.marunouchi.com/lp/street_gallery/



▲丸の内仲通り

【作品マップ】



❖「MARUNOUCHI STREET GALLERY(丸の内ストリートギャラリー)」とは

三菱地所株式会社と公益財団法人彫刻の森芸術文化財団が、芸術性豊かなまちづくりを目指し、丸の内仲通りをメインに、近代彫刻や世界で活躍する現代アーティストの作品を展示するプロジェクトで、1972年から展開。今回は丸の内エリア(大手町・丸の内・有楽町)内に計17の作品を展示します。

1



中村萌 日本
《Whirling Journey》2025
ブロンズ、ウレタン塗料、油絵具、金箔

中村萌 《Whirling Journey》

ゆっくりと、でも確かに、
内側の世界はまわり続けている。

何度も立ち止まりながら、
見えないものたちとすれ違いながら、
わたしはわたしを、育てていく。

混沌の渦をこえて、
その先に見えたひかりが、
今も、静かに瞬いている。

まわって、戻って、また少しちがう「わたし」へ。
どこか遠くて、でも確かに自分の中にある旅のかたち。

この作品が、そんな誰の中にもある、静かで力強い旅
の存在を、そっと思い出させてくれるようにと願って
います。

Profile : 1988年、東京都生まれ。2012年女子美術大学大学院美術研究科美術専攻修了。楠を素材に油絵具で彩色した木彫作品を中心に制作。楠と対話しながら、その中にある形を彫り出すというスタイルで、彫刻や絵画を通じて独自の世界観を表現する。愛らしさや繊細さに加え、ときに恐れや荒々しさも内包した作品は、国境を越えて注目を集めている。国内外の個展や芸術祭に多数参加し、近年は平面作品にも積極的に取り組んでいる。

2



山本桂輔 日本
《眠りながら語らい、歌う》2025
ブロンズ、塗料

山本桂輔 《眠りながら語らい、歌う》

地底には無数の生命が存在し、そして数十億年の営みの
歴史が刻まれています。忘れられていく、無名で無数の
物と事。そして思いや願い。地底という場所は、全てが
溶け込み、混在している世界のように感じます。

茸は、本体は地底にある菌糸体であり、孢子飛散の為の
仮の姿として、目に見えない菌糸が集積されて形作られ
たものです。

地底と大地と空を繋げるものが樹木であり、イメージは
そこを通過して生成されています。様々なものが戯れ、集
積され、茸のように少しずつ形が現れていきます。それ
はあたたかも地底のサーカス、地底王国の宴のようといえ
るかもしれません。

Profile : 1979年、東京都生まれ。2001年東京造形大学美術専攻美術Ⅱ類(彫刻)卒業。2018年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。長い年月、人類がおこなってきた「ものを作る、想像する、思考する」という事への関心を軸に、土壌に埋まった無意識や自然性をいかに掘りだすかを考えながら、彫刻や絵画を制作している。作品には植物、動物、鉱物などを同時に想起させる有機的なモチーフが、図形や抽象形態と絡み合いながら登場する。他愛のない日常や、夢想といった個のもつ抽象的な繊細さを出発点と考え、「特別な、空への憧れ」ではなく、「無名の、忘れられていく地底」といったものを通して世界を見ようとしている。

3



佐藤正和重孝 日本
《Symbiosis(共生)》2025
石、ブロンズ

佐藤正和重孝 《Symbiosis(共生)》

フンコロガシが何かを運んでいる---このユーモラスな光景は、実は環境浄化の一場面で、生き物たちによる浄化作業は、地球のいたるところでおこなわれている。彼らは大真面目で生きているのだが、その姿は微笑ましくもあり、またかけがえなく美しくもある。しかもそれがお互いの生を助け合うことになっているのだから、神々しくさえ思えてくる。

甲虫の美しいカタチ、それはわたしにはまぎれもなく彫刻として感じる。

わたしはそれを石を通して、発現させる。

「ヒト」も彼らと共生できる、隣人の一員であると信じて。

Profile :

1973年、北海道函館市生まれ。1998年東京芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。

黒御影石などの硬質な石材の持つ質感や割れを活かし、古代文明の象徴のように甲虫を「神化」した造形を探究。

様々な角度から美しいシルエットを意識し、石の自然な艶や空洞構造を通じて生命の息遣いや時間の流れを表現している。

4



イワタルリ 日本
《No.2506031》2025
鑄込みガラス、コールテン鋼、板ガラス

イワタルリ 《No.2506031》

私は溶けて熱いガラスが好きです。

これが人それぞれの存在感に変化するからです。溶けているガラスは形を持ちません。それが人それぞれによって変化し、表現されるのです。生きていることは存在するという事です。

私は自分の存在を確かめたいのです。感じたいのです。生きるということは私にとって実感することです。生きることは尊いことです。ですから私は戦争に反対します。私達は私達の存在感をそれぞれの生き方で尊重し合い大切にしましょう。

私はそんなことを考えながら制作を通して表現をしています。

Profile : 1951年、東京都生まれ。1977年東京芸術大学大学院修了。キャストワーク（鑄造）による大型彫刻から、宙吹き技法を用いた色彩豊かで抽象的な花器など、工芸的かつ日常使いの作品まで多岐にわたる。ガラス特有の光による多様な見え方の変化を活かし、キャストワークで生み出されるガラスの塊とその型である耐火石膏や窯出し時に生じたクラックの痕跡を意図的に作品に残すことで、繊細な素材のイメージに相反する力強い存在感を生み出している。

■入れ替え作品（3点）

5



ウンベルト・マストロヤンニ イタリア
《幸運の木》1978
ブロンズ

ウンベルト・マストロヤンニ 《幸福の木》



マストロヤンニはジャコモ・マンズー、エミリオ・グレコなどと共に、戦後イタリア彫刻界を代表する巨匠の一人です。第2次世界大戦中に軍隊に徴兵されましたが、脱走してレジスタンス運動に参加、この間の戦争体験から自由と平和への願望が終生の彼の芸術コンセプトとなっています。彫刻の森美術館所蔵《ヒロシマ》(1960年)は反戦・平和への祈念が込められた作品のひとつです。本作の「幸運」と名づけられた木には、盛んに生い茂る枝、果実がたわわに実っています。戦後まもなくの悲壮感から脱却・再生し、生命に明るい希望を見出した、作者の思いを窺い知ることができるようです。

6



ハツ木のぶ 日本
《象と人(雷)》1946
ブロンズ、フッ素塗料

ハツ木のぶ 《象と人(雷)》



1946年 三重県生まれ。

ハツ木はまず詩を書き、それを元に彫刻を制作します。つらなる丘(曲面体)の向こうで、ざわめきがふたたび大地を蹴り、揺ぶる。

目に見えない音魂の赤色人。

耳にとどかない彩鳴の青色人。

両性具有の距離感を保持しつつ、

時には入れ替わる。

お忍び衣をまとい、

青い落書きが、むく・むく・むく、と迫り来る。

Z楽団をにぎにぎしくも、引き従えて。

(戯れとーお楽しみ)

頭上にピカーッと、とどろき踊る。

赤と青の鋒先が、瞬時にたえずー

期待と不安・顔とカオとが入れ替わる。

イカズチは、仮面と残響を丘に、投げつける。

オオーイ・ゴロ・ゴロ・ゴローオ ！

7



マグダレーナ・アバカノヴィッチ ポーランド
《群衆の一人》1992
ブロンズ

マグダレーナ・アバカノヴィッチ 《群衆の一人》



アバカノヴィッチは、1930年ポーランド生まれ、1960年代後半に、麻を織り上げて作った巨大で有機的な形の作品《アバカン》は、ファイバーアーティストであった彼女は従来のタピスリーの枠を超えた独創的なスタイルを確立しました。80年代後半《群衆》シリーズは、人体を主題にしており、麻布で覆われた頭部のない、身体の片面だけが形とられ、裏が空洞になっている像が何体も並び、抑圧された人間の不安や孤独が迫ってきます。この作品は、麻布の荒い表面をそのままブロンズで鋳造しています。個性は剥ぎ取られて群衆のなかに埋没してしながらも生き残る人間の不屈の意志が伝わってきます。

8



中谷ミチコ 日本
《小さな魚を大事そうに運ぶ女の子と金ピカの空を飛ぶ青い鳥》2022
ブロンズ 塗料

中谷ミチコ

《小さな魚を大事そうに運ぶ女の子と金ピカの空を飛ぶ青い鳥》

魚の泳ぐ水をスカートで大事そうに運ぶ女の子は妊婦です。全ての人は胎児だったから、この作品の主は魚です。虚と実を行き来しながら、揺らぎの中で確かなモノを探すためには、やはり物質とそれが作りだす凹凸を手探りする自分が自分には大切で、だから私は彫刻を作っているのだらうと思います。凹凸に起こる無数の反転が、見る人の身体を取り込みながら、作品と一人一人の間に結ばれる関係を「唯一のもの」とする場所にしたいと思いました。

Profile : 1981 年、東京都生まれ。2012 年ドレスデン造形芸術大学修了。一般的なレリーフとは異なり凹凸が反転している立体作品を制作。物体の「不在性」と「実在性」を問い続けている。2014 年より工場を改装した「私立大室美術館」で毎年敬老の日限定で個展を開催するプロジェクト「When I get old」を実施する。

9



H&P.シャギヤーン 日本
《Matching Thoughts》2022
ブロンズ 塗料

H&P.シャギヤーン 《Matching Thoughts》

本作品はアンリ・シャギヤーンとピエール・シャギヤーンが 2004 年にウィーンで制作した 2 枚の絵をもとに造られた立体作品である。当時の作品をベースに、単にビジュアルが目立つだけでないものを目指した。現代アートとしてはマテリアルも古く、革新的な造形ではないが、ディテールやその中に潜むエスプリに、2 人が持っている近代彫刻へのリスペクトをどれくらい込められるかが課題であり、この 2 体の彫刻に反映させている。

Profile : 2004 年、ヨーロッパの古都ウィーンに滞在制作中だったアンリが、古くからの友人であるピエールを呼び寄せたことをきっかけに始まったアートユニット。作品はあくまでも 2 人の楽しみから生まれたものであるため、あえて発表を行うことはなかったが、2008 年に初めての個展を MISAKO&ROSEN で開催。

10



名和晃平 日本
《Trans-Double Yana(Mirror)》2012
アルミニウム

名和晃平 《Trans-Double Yana(Mirror)》

3D スキャンしたポリゴンの表面にエフェクトをかけ、そのデータを再び実体化する「Trans」は、2012 年から続く彫刻作品シリーズ。人体モデルから読み取った情報が、質量をもつ物質に還元される過程において、流動性のある三次局面が生成され、情報データという表皮をまとった立像が形作られます。影と実体、現実とヴァーチャルの境をさまよう「Trans」は、虚ろなエネルギー体となって、現代における存在のリアリティーを問いかけます。

Profile : 彫刻家/Sandwich Inc.代表/京都芸術大学教授 2003 年京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程彫刻専攻修了。感覚に接続するインターフェイスとして彫刻の「表皮」に着目し、セル(細胞・粒)という概念を機軸に、彫刻の定義を柔軟に解釈し、鑑賞者に素材の物性がひらかれてくるような知覚体験を生み出してきた。

11



舟越桂 日本
《私は街を飛ぶ》2022
ブロンズ 塗料

舟越桂 《私は街を飛ぶ》

舟越桂は、日本を代表する彫刻家のひとりである。人物の頭部には、教会、本、並木道が配され、記憶や思い、自然、個人の心の中にもある距離や空間的広がりを見せている。パブリック作品としての希少さもさることながら、着彩されたブロンズ作品としては自身の初作品となる。作品が設置される場所の日の動きまでも考慮し着彩された人物像は、静謐さの中にも華やかさと上品さを感じ、時間や季節の移り変わりと共に、街の喧騒と静けさに寄り添いながら、通る人々に「記憶」や「想い」を語りかけるであろう。

Profile : 1951年、岩手県生まれ。父は彫刻家・舟越保武。父の影響で彫刻家を志す。75年、東京造形大学造形学部美術学科彫刻専攻卒業。77年、東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。性別を感じさせない半身の人物像を特徴としており、2005年からは人間と動物との混交像「スフィンクス・シリーズ」を手がけている。

12



三沢厚彦 日本
《Animal 2017-01-B2》2017-2019
ブロンズ 塗料

三沢厚彦 《Animal 2017-01-B2》

三沢は動物をテーマにした「アニマルズ」を発表し、支持を得ています。ブロンズをほぼ等身大に彫り込み彩色をした動物たちが存在感を放ち、見るものの記憶やイメージを喚起します。「クマ」と聞くと可愛いキャラクター、獰猛な動物と、相反するイメージが共存しており、この作品では中間的な表現をしています。二足で威嚇するポーズはクマらしい象徴的なものですが、様々な目的で大都会を行き交う人々を俯瞰して眺めています。

Profile : 1961年 京都府生まれ。1989年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻修了。2000年動物の姿を等身大で彫った木彫「Animals」を制作開始。主な受賞歴に2001年第20回平櫛田中賞、2019年第41回中原悌二郎賞など。近著に2013年の作品集「ANIMALS NO.3」(求龍堂)、「動物の絵」(青幻舎)。

13



ジム・ダイン アメリカ
《展望台》1990
ブロンズ 塗料

ジム・ダイン 《展望台》

アメリカを代表するポップアートのアーティストの一人。抽象表現主義的なタッチで描いた画面に、日用品を取り付けた絵画を制作しています。《展望台》は、《ミロのヴィーナス》を実物よりも小さく模し、頭部を失くして面取りした2体を、ブロンズの台に乗せたもの。「私は自分の伝記の記述者であることにしか興味はない」と述べる通り、《ミロのヴィーナス》も作家の情感を反映したものに姿を変えられています。

14



パヴェル・クルバレク スイス
《ニケ 1989》1991
鉄 塗料

パヴェル・クルバレク 《ニケ 1989》



1928年にチェコスロバキアの7代にわたる鍛冶屋の家に生まれ、1968年にスイスに移住しました。「私の作品は、鍛冶屋だからこそできること。古典的で抽象的な彫刻で自分自身を表現することができます。」と生前に答えています。1980年以降は公共の環境芸術のために活動し、この作品はルーブル美術館で所蔵されている《サモトラのニケ》のオマージュ作品で、高さが7メートルにも及びます。

15



ヘンリー・ムーア イギリス
《羊の形（原型）》1971
ブロンズ

ヘンリー・ムーア 《羊の形（原型）》



ヘンリー・ムーアは近代を代表するイギリスの彫刻家。人物や動植物など自然の形態からアイデアを得ています。

《羊の形》は母と子がテーマで、工房から見えた牧場の出産時期の羊がモデルになっています。形は非常に抽象的ですが、雌羊が周囲を警戒しながら寄り添う子羊を守っているようにみえます。母と子のテーマに対する関心は、大きいものと小さいものの二つの形の関係における彫刻の無限の可能性があるとムーアは考えました。この原型を元にした高さ5m70cmの作品は、イギリスのヘンリー・ムーア財団他、世界3箇所に展示されています。

16



ルイジ・マイノルフィ イタリア
《巨大な町》1987
ブロンズ

ルイジ・マイノルフィ 《巨大な町》



1948年、イタリアのロトンディ生まれ。第5回ヘンリー・ムーア大賞展で優秀賞を受賞したこの作品は古代イタリアにアイデアを得て制作されました。遠くからは青銅色のふくよかな人の形にみえますが、近寄って見ると、全体に窓状の空隙が無数に施されています。まるで古代の城塞か、中空都市のようにも見えます。この時期、都市の成長や人間の存在を象徴する彫刻を制作しており、本作でも自然界から生まれたブロンズと人体のフォルムに、人間の生み出した文明の象徴である都市を組み合わせることで、両者の調和や緊張感を視覚化させています。



レナーテ・ホフライト ドイツ
《凹凸のブロンズ》1989
ブロンズ

レナーテ・ホフライト 《凹凸のブロンズ》

1950年、ドイツに生まれ、シュトゥットガルト州立美術アカデミーで版画と彫刻を学びました。この作品は、ブロンズの表面が風景を映しこみます。凹面は風景(丸の内テラス)を光学的に縮小した反転画像として反映し、凸面は風景(車道)を吸収するように見え、その曲率の最高点で最も深い錯覚を示します。太陽光を受けて光り輝き、作品の中に空間が取り込まれ、一体になることを意識して制作されました。

<丸の内“まちまるごとワークプレイス”構想>

丸の内エリアの特性の一つは、135年以上にわたるまちづくりを通じてお客様や様々なステークホルダーと共に築き上げてきた「利便性と集積」です。その特性を踏まえ、テナント企業が自社オフィスだけでは実現できないことや、個社単独の取り組みでは実現しにくいことを「まちまるごと」でサポート、エリア全体がプラットフォームとして機能することで、働き方の質や効率を高めます。

Marunouchi



▲まちまるごとワークプレイスのイメージ

始動リリース：https://www.mec.co.jp/news/detail/2025/05/22_mec2500522_machi

—耳とからだで聴く、彫刻たち。—

Be Smart Tokyo × 丸の内ストリートギャラリー 「Auris」で拡がる新アート体験 提供開始

「第44回 丸の内ストリートギャラリー」の実施に際し、株式会社GATARIのMixed Reality（MR、複合現実）※1プラットフォーム「Auris（オーリス）」を活用した、視覚障がい者を含む誰もがアートを体験できる音声コンテンツの提供を開始いたします。



・オリジナルガイドストーリー

3年ぶりに作品の入れ替えを実施した丸の内ストリートギャラリー。各作品にまつわるエピソードや、丸の内の歴史を織り交ぜた、「アートと丸の内を楽しむ」オリジナルのガイドストーリーをお楽しみいただけます。

・誰もが楽しめるコンテンツ提供

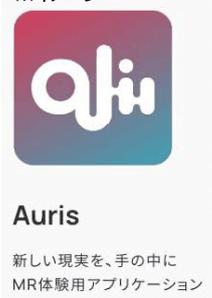
音声による誘導とナレーションを組み合わせたコンテンツ設計を行い、リアルな空間における身体の動きと連動した音の演出によって、視覚に障がいのある方も安心してお楽しみいただけるコンテンツを提供いたします。

・作品を“目で見る”だけではなく、“耳で聴き、心で感じる”体験へ。

丸の内ストリートギャラリーに配置されたアートの前で、視覚だけでは受け取ることのできない、作品の背景や物語、空気感を味わうことができます。
音でひらかれる、新しいアートとの出会いを、どうぞお楽しみください。



※イメージ



※1 Mixed Reality（MR、複合現実）：リアル空間とデジタル空間がシームレスに融合し（ミックスされ）、リアルなモノとバーチャルな情報を等価に表示・操作することができる状態のこと

【実施概要】

- 期間 : 7月8日（火）～提供開始
場所 : 丸の内仲通り（丸の内ストリートギャラリー）
体験時間 : 10時～18時 ※7月8日（火）初日のみ15時～18時
料金 : 無料 ※通信料はご負担ください。
事前予約 : 不要
対象年齢 : どなたでも ※小学生以下は保護者同伴。
主催 : 丸の内ストリートギャラリー
(三菱地所株式会社 / 監修:公益財団法人彫刻の森芸術文化財団)
協力 : Be Smart Tokyo
企画・運営 : 株式会社GATARI
WEBサイト : <https://www.marunouchi.com/pickup/event/7085/>
※実施内容、体験方法の詳細は、上記WEBサイトからご確認いただけます。

以上